

2023年度311ゼミナール第5期

報告書

被災地実情班

4年佐藤駿

4年半田柊斗

3年小野崎彩菜

2年阿部志帆

2年高橋輝良々

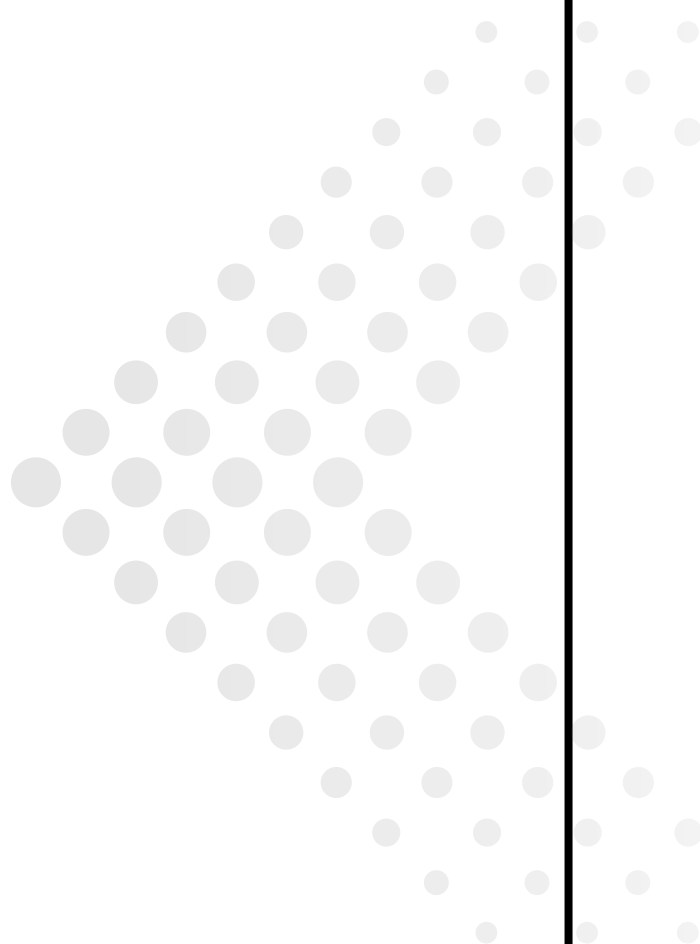
4年柴田敬介

4年吉田翔吾

3年在原真優

2年五十嵐真子

2年皆川満里奈



目次

はじめに 01

2023年度活動計画 02

門脇小学校学校避難追体験 03

女川町の聴き取り 04

今後の展望 05

ゼミ生感想 06

01 はじめに

被災地実情班について

私たち被災地実情班は、4年前から宮城県石巻市牡鹿半島をフィールドにし、現地の方へのインタビュー調査や現地の視察を行ってきた。昨年まででは震災から10年の節目を迎えた被災地を視察し、その様子は風化されていることはなくこれからの後世につないでいく必要性があることを感じ取ることができた。

今年度は班員である高橋輝良々が門脇小学校時代に震災を経験したということから、班員全員で門脇小学校へ赴き、彼女の被災を追体験した。

また、これまで触れてこなかった女川地区の震災当時の様子についても、実際に女川へ行き阿部一彦先生から話を聞き取った。



活動のテーマ

「学校現場での震災を追体験し、
具体的に知り、後世に伝える」

昨年度までで震災の大まかなイメージをつかむことはできたため、今年度はこれから教員になる私たちに必要となる、学校現場での震災を実際に追体験する中で考えを共有し、より具体的に伝えていく方法を考察する。

活動計画

○活動地

石巻市南浜地区、女川町

○取材対象

- ・高橋輝良々さん震災時門脇小学校1年2組
- ・鈴木洋子さん 震災時の門脇小学校校長
- ・飛知和（旧姓菊池）香さん震災時門脇小学校1年2組担任
- ・草島真人さん 震災語り部(震災時の南浜地区住民)
- ・阿部一彦さん 北上中学校校長(震災時は女川第一中学校教諭)

○行程

【9月27日】

- 11:00 JR女川駅で周囲視察、昼食
- 13:00 阿部一彦先生と合流し女川町を歩きながら当時の出来事を振り返る
「まちなか交流館」会議室で阿部先生の講話を聴き、意見交換
- 17:00 女川トレーラーハウス宿泊村 ホテル・エルファロに宿泊

【9月28日】

- 9:30 鈴木洋子先生と日和山までの避難を追体験する
- 10:30 MEET門脇にて鈴木先生と語り合う
- 13:00 MEET門脇見学
- 13:30 草島真人さんと実際に家があった場所付近を歩き、語りに触れる
- 14:30 振り返り、総括をする

高橋輝良々聴き取り

今回の視察の前に班員で震災当時門脇小学校1年生で被災した高橋輝良々さんに聴き取り調査を行った。当日の話や亡くなってしまった友達の話聞くことができ、視察につながる有意義な時間になった。

○震災当日の行動

放課後に本人含め友達4人が学校に残っていた。下校途中の門脇小学校の横の墓地の階段を上ったいた時に地震が起きた。一緒にいた男の子が学校に戻ろうと言ったため、戻ると学校にいた人たちが校庭に出てきて、そこで担任と合流することができた。地域住民の人も多く集まっていたが、そこでの引き渡しはせずに日和山の方へ避難を開始した。桜坂高校への道中高橋父とたまたま出会い、一緒に避難をすることになった。桜坂高校の中が混んでいたため、神社へ避難し、そこで初めて児童名簿を確認しながら保護者への引き渡しが始まった。母と妹は石巻中学校に避難していたため、父と石巻中学校へ行き、4人で隣にあったハローワークに避難をした。お母さんと会った時に涙があふれてしまい、そこで初めて心配し不安になっていることを実感した。家に初めて帰ったのは地震から3日後のことで、家は無事だった。

○避難について

校長先生から聞いた話では、桜坂高校に入れなかったことは想定していなかったが、日和山公園、神社に避難するルートは予定通りであった。しかし、石巻高等学校に行くルートは決まっていなかった。

震災前の避難訓練については覚えていないが、震災後の避難訓練では机に潜り、校庭に出てから体育館に行き、親への引き渡しを行う。そのご保護者と通学路の危険な場所を探し一緒に帰るといった避難訓練をした。

これからは、登下校中に家に戻るべきなのか、学校に戻るべきなのかの判断する避難訓練をしたい。学校外での避難訓練は地域住民の人にも繋がると思う。

避難中で一番覚えていることは音と声が印象に残っている。「後ろを絶対見るなよ」の呼びかけや瓦礫が壊れる「バリバリ」という音やクラクションの音が記憶に残っている。

○避難生活について

ハローワークの建物内の一部屋に4家族が入り生活した。家族同士が知り合いだったためそこは安心だった。

食事はソーセージが一家族一個割り当てられ、子どもには時々飴が配られた。毛布は全員分なかったため、何人かで使っていた。トイレは仮設トイレを使っていた。3日間の避難生活で物資が届いていたようだが、実際にもらいに行く事はなかったため十分な量が配られていなかったと思う。

自分の家に帰ってからも水と電気が使えず、ろうそくを電気代わりにしていた。トイレは仮設トイレが4個ある場所があった。仮設トイレがないときは、社宅の前で、穴を掘り、土をかぶせる方式だったが、嫌で行きたくなかったことを覚えている。夜は懐中電灯が必要で、夜だと影が出てしまうから本当に嫌だった。

社宅では、物資が余るくらい配られていて、パン・カップラーメン、お湯で白米になるご飯などを食べていた。お風呂も使えなかったため、仮設シャワーを何日かに一回借りていた。電気が復旧したのは4月中のことだった。

○先生たちの対応と周りの子どもたちの様子

先生たちは、上着も何も着ていなくすぐに駆け付けてずっと対応してくれていて、安心させるような声掛けのおかげでクラクションが鳴る音や建物や車が壊れる音への

恐怖が和らいだ。引き渡しの時には高橋さんの担任が持ってきた名簿が活躍していて、スムーズに引き渡せていたため、すぐに家族に会うことが出来た。

(名簿を持ってくることはマニュアルにあったわけではなく、咄嗟の判断)

避難中は途中でしゃかんで立ち止まることはなく、スムーズに行うことができた。周りの子どもたちは泣いている子が多く、しゃがんで迎えを待っていた。高学年の人

たちが率先して声掛けをしていて、保護者に早く子どもを迎えに行くように呼び掛けていた。

○班員からの質問

Q. 他の震災遺構をみて思うことはあるか

A. 自分が生活していた場所とそうでない場所では印象が全く違う。他の遺構を見る時は、自分が被災者じゃない立場で見えてしまっている。遺構が全部残っているものについて羨ましく思うことはない。

Q. 門脇小学校に亡くなってしまった友達の物が展示されていることについてどう思うか

A. (昨年の視察で訪れるまで)あることを知らなかった。生きていたんだなという実感や安心感があった。その反面、もういないんだなということを思い、その二つがごちゃごちゃになって涙が出てしまった。忘れていたものを展示で思い出した。でももう戻らないものだから、複雑な気持ちだった。

Q. 昨年の視察で門脇小学校を訪れてこなかった理由は

A. 何かのきっかけがあったときにしか入ろうとしか思わなかった。小学校の先生になったときに訪れたいなと思っていた。でも班員の皆と一緒に入れる機会をくれたから、行こうと思った。きっかけを作ってくれたから入ろうと思った。

Q. 訪れるときは、一人で入ろうと思っていた

A. 小学校の先生になろうと思っていたのは、震災の前から。亡くなってしまった友達と一緒に先生になりたいねって言っていてその話を思い出した。お線香も上げる場所が分からなかったから、これは先生になったときに門小であげようと思っていた。その子から最後にもらった鉛筆を持って行ってたから、今までの思いを少しでも伝えることができたと思う。

Q. その子と一緒に居たいなとは思っているか

A. その子と一緒に生活ができていたら、他の夢があるかもしれないし、震災がない生活は想像できないけど、2人で夢がかなっていたのかもしれない。

Q. 班員のみんなと行けた時の気持ちは

A. ずっと行きたいと思っていた。行けた喜びのほうが強いのと思っていただけ、泣いてしまったのは不思議。一人で行っていたら怖かったと思うが震災について学ぼうとしている人たちと行けたことにとても感謝している。

Q. 避難生活での周りの子供たちはどんな様子だったか

A. 社宅に住んでいる子が多かったので、簡単に会うことはできていた。外に出てはいけないと言われていないが、瓦礫がそのまま危険だと言われていたので、となりの家の子と二家族一緒に過ごしていたので遊んでいた。おままごと、滑り台、震災前と変わらない感じで遊ぶことはできていた。

Q. 震災を経験したうえで将来子どもたちに伝えたいことは何か

A. 基本的なことではあるが、地震が起きたら津波が来るか来ないかわからなくても、高台に逃げる。学校で防災教育をすると思うが、それを家族に教え、子どもが家族に教えて広めてほしい。家族が心配で戻った人が多かったということなので、自分はここに避難すると決めていることを伝えたり、学校で学んだことを地域に広めたりすることで、救える命が増えると思う。そのために、自分の経験を伝承してそれを子どもたちが語り部として活躍することをしてみたい。語り部が高齢化しているため、これからは、被災していない人が伝えていかなければならないと思うので、その方法を実践してみたい。

Q. 3月9日の地震は覚えているか

A. 覚えてはいない。地震が起きた時に、学校以外の場所や知らない場所にいたときにどこに逃げるべきなのかを知っておきたい。家族や友達の状況、周りの安全、自分の安全、家族の避難場所についても予め話し合っておくことで、当日の不安が少しでも和らぐと思う。

震災時の学校避難ルート



(校庭からの避難)

- ① 2分14秒：墓地横坂
↓
- ② 3分43秒：1年生避難完了場所
↓
- ③ 4分05秒：お父さんと合流
↓
- ④ 7分08秒：桜坂高校ポスト
↓
- ⑤ 13分24秒：日和山公園
↓
- ⑥ 15分38秒：鹿島御児神社



鈴木洋子先生のお話

追体験の際も同行していただいた、当時の門脇小学校校長鈴木洋子先生に追体験後、講話を行っていただいた。

○当時の避難の様子

- ① 第一次避難：教室、机の下
- ② 第二次避難：校庭
- ③ 第三次避難：日和山公園
- ④ 第四次避難：鹿島御児神社にて引き渡し
- ⑤ 第五次避難：宮城県石巻高等学校避難所



○旧門脇小学校が伝えているもの

- ・強い地震発生→迅速に・高台へ逃げる
- ・学校に残った教職員と救助に駆け付けた地域の人らが連携して教壇を渡し、校舎に避難した
人たち(約40人)を裏山へ逃がしたこと。
→「命の架け橋」・「命の階段」

○『避難の連鎖』

子どもたちの命を守ることは、地域住民の命を救うことにもなる。

子どもたちが先に高い場所へ逃げたことで、学校に避難してきた地域住民に「山へ逃げたらしい」と伝わり、避難の連鎖が生まれる。

→リアルタイムで被災している人は何が起きているか分からないため、情報が重要になる。

○防災教育として取り組んできたこと

①「子どもの命を守る」防災教育

避難訓練、引き渡し訓練→子どもたちがどうやって避難しているかをやるたびに反省し、提案

②日常の生活指導の徹底 - 規範意識の醸成 -

廊下は静かに歩く、朝会や集会時は素早く整列する、教師の話をしっかり聞く

○これからの防災教育 - 「自分で判断し行動できる子ども」を育てる -

- ①横断的な防災・減災学習の推進→系統的・継続的な指導を通して
- ②地域との連携→相互に防災意識を高める関係性を築き上げる
- ③「生き抜く力」を培う

飛知和（旧姓菊池）香先生からの聴き取り

輝良々さんの震災追体験中に保護者への引き渡しの話が上がった。そこで学年簿を持っていた当時門脇小学校1年2組担任の菊池香先生のおかげで迅速に引き渡しをすることができたということがわかり、後日11月20日に宮城教育大学にて菊池香先生に当時の話を聴き取った。

○当日の行動について

当時は1年生の担任を務めていた。1年生はほかの学年よりも早く授業が終わるため、地震発生時は職員室にいた。

避難訓練の経験から、出席簿を持っていかなければいけないということが頭にあった。学校の重要なものを保管している場所を決めており、そこから出席簿を持って避難に向かった。この行動はそこまで考えて行動したわけではなかったが、名簿には保護者の名前等も記載されており、結果的に引き渡しがスムーズになる要因となった。

出席簿は全教員が渡されていたが、教室に常備している先生はおらず、子供たちと一緒にいたため持ってくることができなかった。現在は引き渡し名簿が職員室に常備されるようになり、教頭や校長、主観教員が持ち担任は持たなくなっている。



名簿を持ち日和が丘公園方面に避難をした。日和が丘公園に着き、下を見ると大きな津波が押し寄せてきていた。その場ですぐに引き渡しをすることはできないため、神社の本殿に避難した。そこで保護者が来ていた人には、出席簿を利用して引き渡しを行った。

その後は石巻高校に避難し1クラス分教室を貸してもらえた。自分が担任するクラスの子供で2名保護者が迎えに来れない子供がいた。1年生だったため寝付けず、来ていた羽織を貸して一緒に夜を明かした。

2日目には迎えに来れなかった保護者に引き渡すことができた。その後はいろんな学校を回って安否の確認を行い、3月下旬までは石巻高校を借りて作業をしていた。

○輝良々さんとの別れについて

香先生は初任から3年目だったため、震災後すぐにほかの学校に移動することとなり、女川の小学校に移動した。そのため、終業式の日には子供たちと話をしたのが最後だった。

このことについて輝良々さんは「3月11日がお別れの予定ではなく、石巻小学校も知らない場所ではなくなった人が多すぎて、こういうものなのかもしれないと思った。」と語っている。

門脇小学校の閉校日に香先生は後ろから子供たちの姿を見ていたが、話しかけることはなかった。そのため対談を行ったこの日は12年と8か月振りの再会の日であった。

香先生自身、傷ついている子供たちをそのままにしてしまったことがずっと心残りだったと話している。



○ななせさん（輝良々さんの親友）について

香先生のクラスの中で一人だけ見つからない子どもがいた。その子供が輝良々さんの親友である、ななせさんである。お兄さんは避難所にいたため、何とか生きていたほしいと香先生は願っていた。地域の住民の話によると、ななせさんは最後にお母さんと合うことができていたらしい。家には寝たきりのおばあさんもいたようだ。お父さんも残念ながら、仕事場で被災をした。お兄さんはその後、親戚の人に引き取られ、違う学校に転校してしまった。

今年輝良々さんは、家の中でななせさんに書いた手紙を発見した。それは授業で書いたものであり、この手紙が何の授業で書かれたものなのか気になり、香先生に尋ねた。香先生によると、その手紙は、生活科の時間で七瀬さん宛てに書いた「ありがとうカード」ではないかということが分かった。

○班員からの質問

Q.自身の体験を話すことはあるのか？

A.防災の日に言っている。津波の恐ろしさは防災訓練や防災の授業の時に話している。亡くなってしまった子どものことも伝えている。

Q.震災前にやっておけばよかったこと

A.避難訓練はとても大事だったと思う。日和山まで避難する訓練はとても良かった。下校した子供にも避難の仕方を教えておけばよかった。今はそういうことが起きた時にはどこに避難するのかということ保護者の方と共有しているはず。

Q.子どもたちに震災をどう教えているのか？

A.知らない子供たちには、写真を用意して、見たら辛くなるかもしれないよって忠告してから見せている。先生自身も辛くなったり夢に見ることはある。多賀城も海側の方は被害が大きかったのをそれを見せたり本を使ったり。具体的なものを見せたり考えさせたりする。イラストとかを使って確認したりしている。

真剣に聞いてもらうためにも自分の話を初めにしている。どうやったら助かるのか助からないのかを話したうえで、聞いてもらう。先生方の中でも、震災を経験していない先生がいるため研修をしっかりとっている。



南浜地区被災住民の聴き取り

門脇小学校がある南浜地区の避難についても聴き取りを行うため、南浜地区の元住民である草島真人さんと現場を歩き当時の様子をうかがった。

○草島さんについて

草島さんは、静岡県浜松市の出身で、生まれてすぐに引っ越し、石巻市に来た。震災当時は南浜地区のより海側の雲雀野に住宅があったが、津波により住宅は流されてしまった。震災当時、地震が発生してから一度住宅に戻った為、草島さんは「判断を間違えたが、たまたま生き残った」と語っている。その経験をした自分にしかできないことを、という気持ちがあり現在は伝承活動や、地域のコミュニティ活動に協力している。



○南浜地区の概要



南浜地区は、津波の襲来とその後に発生した火災の影響で500人以上の方が犠牲になった場所である。特に被害の大きかった南浜地区は地震、津波、火災及び地盤沈下の被害を複合的に受けており、東日本大震災の平野部の被災を代表する場所となっている。

○草島さんの避難経路

草島さんの避難経路の概要は、右のマップの通りである。草島さんは、地震発生の瞬間、車の中にいたという。車の中で揺れを感じ、ラジオで宮城県沖の地震であること、津波警報が発令されるという情報を知った。そこで家を出た際、家族が自宅に残っており、子どもが自宅にいて連絡が取れないことから、草島さんは家に戻ることを決意した。地震直後の自身の自宅の様子を見て、避難所での生活を予期し、車で門小に向かった。車を門小から離れた場所に停め、歩いて門小へ向かった。しかし、門小に到着すると、他の避難者と食料や飲料をできる人が準備するべきだという話になり、危険と感じながら再び自宅へ戻った。戻った先で津波が堤防を越えるのを見て、死を覚悟しながらも車で門小方向へ逃げ、より高いところを目指し逃げ続けた。



○草島さんが避難中に見たこと、伝えたいこと

震災の地震発生後に受信したラジオによると、第一波は最大1.2mとのこと、石巻はどんなに高くても3分の1しか津波は来ないという言い伝えを信じ、草島さんは自宅に一度戻ることにした。しかし、車で自宅前にいたところ、当時まっすぐになっていた道路の向こう側に水が流れ込んでいるのが見えた。その時、「人ってこんなので簡単に死ぬのかと思った。防災の知識も一応学んでいて中途半端に自信があった。それが裏目に出てしまった」と語っている。しかし、ベストを尽くし、何とか車で難を逃れた。その車で避難する際、津波に気づいていない人がまだまだたくさん住宅に残っている姿を目撃したという。実際に津波が迫ってきて、遠くの方を見ると一軒家が急に爆発して消えていくように見えた。それは爆発したのではなく、津波によって家々が流されていく姿であった。その姿を見て、草島さんは必死に避難を呼びかけたが、聞く耳を持たない人がほとんどだったという。「人は逃げろといっても逃げない」ということを知り、逃げろという人々は自分の家の中に逃げ込む人が多かったという。

総括

私たちは今回輝良々さんの震災当時の追体験を行うことで、震災発生時にどのような行動が命を守るのかということ学ぶことができた。多くの子供や地域住民の命を守った門脇小学校の避難行動を、輝良々さんの実体験を通して知ること、これまでの活動では得ることができなかった学校避難の方法を知ることができた。

一つ目に重要だと感じたのは日ごろの避難訓練である。避難訓練といっても校庭にただ逃げるだけではなく、その地形にあった避難場所まで避難してみるということが重要だと感じた。それにより、落ち着いて避難をすることができるのだと分かった。

二つ目は日ごろの意識についてである。教員は子供たちの命を守らなければいけない立場にあるため、いつでも緊張感を持ち、いついかなる時でも命を最優先に守る行動をする必要があると感じた。特に、門脇小学校では、鈴木洋子先生の指導の下、廊下ではスムーズに歩けるように必ず右側を歩くといった、日ごろの習慣づけが、命を守る行動につながるのだと感じた。

三つ目は、子供たちに伝承する教員の「言葉」の重要性である。鈴木洋子先生や香先生は、震災の話をするときに、まず自分の実体験から話すと語っており、それにより、子供たちは真剣な態度に変わると教えていただいた。また、一つ一つの言葉を子供の目を見て伝えたいという気持ちを込めて、話すことが一番相手に伝わる話し方なのだと再実感した。

最後に、輝良々さんの体験を通して私たちは、すべての命を守る行動をしなければいけないと改めて考えることができた。取りこぼしてしまった一つの命は、周りの人にとっても大きな影響を及ぼすのだと、班員全員が感じることもできたため、そのような悲しい思いをする人を作らないよう、災害への意識を高めていきたいと今回の体験を通じて思った。

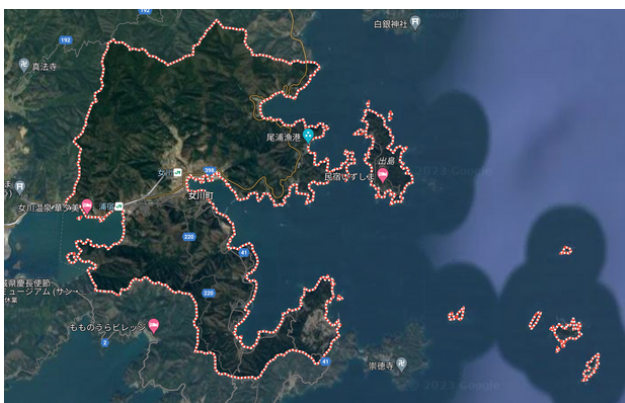
阿部一彦先生について

これまで4年間の活動の中で石巻市女川町についての聴き取りを行うことができていなかったため、当時女川町立女川第一中学校教諭の阿部一彦先生の案内で、女川町内と旧女川第一中学校を視察し、語り合いで被災について考えた。

- ・ 現 在
北上中学校校長
- ・ 震災時
女川町立女川第一中学校教諭



女川地区について



女川町は、宮城県の東、牡鹿半島基部に位置している。

東日本大震災により被災した三陸地域に創設された「三陸復興国立公園」地域に指定されている。

東日本大震災以降、大きく生まれ変わった女川町はJR女川駅を中心に商店街が広がっている。

平成23年3月11日14時46分、突き上げるような縦揺れと大きな横揺れが発生し、女川町では震度6弱、地震による津波は最大津波高14・8m、最大浸水高18・5m、最大遡上高34・7mを観測した。

下の表は、女川地区の被災状況を示している。

最大津波高	14.8メートル：港湾空港技術研究所調査
浸水区域	320ヘクタール：国土交通省被災状況調査
被害区域	240ヘクタール：宮城県発表
人的被害	町人口：10,014名（平成23年3月11日時点）
	死者：574名（平成27年3月1日現在）
	死亡認定者：253名 （震災により行方不明で死亡届を受理された方）
住家被害数	住宅総数：4,411棟
(一般的な家屋)	被害総数：3,934棟（89.2%）
	全壊：2,924棟（66.3%）
	大規模半壊：149棟（3.3%）
	半壊：200棟（4.6%）
	一部損壊：661棟（15.0%）
避難状況	最大25ヶ所 5,720名（平成23年3月13日時点）
二次避難	延べ360名

阿部先生と女川を歩いた話について

阿部先生が経験した当時の様子とともに、女川いのちの石碑についてお話しいただいた。

震災当時だからこそ、学校の様子を聞くことができ、「本当の学校」について深く考えることができた時間であった。

また、子供たちという存在の大きさを再認識させられ、教員という子どもたちを守る立場になるということ踏まえ、高い使命感や責任感を改めて持つ必要があると感じた。



震災後の活動について



震災直後に女川第一中学校(現在の女川中学校)に入学した生徒らが、将来の津波被害を最小限にする取り組みの一つとして、地域住民と一体となり女川町内全ての浜に設置した石碑である。

- ① 非常時に助け合うため、普段から絆を強くする。
- ② 高台にまちを作り、避難路を整備する。
- ③ 震災の記録を後世に残す。

この3つを合言葉に、この石碑が建られている。

阿部先生と話したことについて

阿部先生がかかわるプロジェクトや教え子が行う活動についてお話をいただいた後、意見交換を行った。

特に、阿部先生の「これまでは経験させてあげられていなかった。」という言葉があり、震災を経験したということを経験した特別なものにするのではなく、私たちが教員として、311ゼミの活動を通して学んだことを基に、有意義な体験させてあげられるようにしなければいけないと強く思った。

また、それぞれが感じたことを阿部先生に質問し、意見交換を行ったことで、ただ当時の話を聞くだけで終わらせず、より深く、自分事として考えることができ、とても有意義な時間となった。



総括

私たちは今回女川いのちを守る石碑を中心とした視察と、阿部一彦先生の講話、その後の意見交換を通して、教師として児童生徒のためにできることがたくさんあることを再確認することができた。

とても印象に残っているのは、始まって間もなく飛びだしてきた「教職を辞めて震災を伝える活動をしたい」「SNSに阿部一彦は生徒を殺したって書き込んでほしい」という阿部先生の言葉であった。ここで、東日本大震災がたくさんの方の未来や人生を変えるような出来事であったことを改めて感じるとともに、この言葉から震災について伝えることに尽力したいという気持ちを肌で感じる事ができた。

また、阿部先生は大きな被災を受けた女川でも、学校という場所に生きていくための希望を見出しており、その希望というのが、「子どもたち」の存在であった。子どもたちの元気な姿や笑顔が、そこに集まった大人の活力につながっていた。

やはり、子どもと地域の人々をつなぐことが非常に大切であり、大人が子供を守っているつもりでいたが、大人も子供から支えられていることに気が付くことができたという。被災した中で、子どもの命を救うことは、大人の命を救うということに等しいと言えるのではないかと感じた。

さらに、阿部先生が行った震災に関する授業についてだが、子どもたちに悪影響だと思い、バスや教室のカーテンを閉めていたということもあり、国語の俳句の授業で何もかけないと思ったけど、子どもたちは書けていたらしい。阿部先生は、「大人が思っているくらい子どもは幼稚じゃない」、「選択肢を与えないのは良いことではない」と感じていた。私たちも、子どもは大人が思っている以上にいろいろ見てるし感じているからこそ、そこからどう学びにつなげていくかを考えていく必要があると感じた。

最後に、阿部先生との活動を通して、震災発生から復興という流れの中で、学校という場所で、教員という立場で、私たちは何をすべきなのかを改めて考えることができた。これは考え続けなければいけない問いであり、正解がないからこそ、ベストではなくともベターな選択がとれるよう、これからも研鑽を積んでいきたい。

展望

私たちはこれまでの活動の中で、被災地実情班として多くの被災地を視察し、体験談を聞くことができた。そこで、来年からは、私たち自身が震災を伝える立場になりたいと考えている。具体的な内容としては、これまで被災地実情班の活動の中で聞いてきた話を、震災を経験していない人に語り部として伝えるということや、教員になった際に教師として、子どもたちにどのように伝えるべきなのかなどを考えていきたい。

また、もう一つの展望として、被災地実情班という名前の下、実際に被災地に重きたいとも考えている。これは、今年度までの様に宮城県内を視察するというだけでなく、県外に出て、他の地域の被災についても知りたいと考えている。具体的には福島県の被災などが上げられる。さらに、来年度以降の新しいゼミ生で被災の経験がある人がいる場合、そのことについても被災地実情班の中で共有をしたい。それができない場合であっても、可能な限り被災者に会い当時の体験と共有を実際に行いたいと考える。

最後に今年の1月1日に起きた能登半島地震についても現地に行き被災者の話を聞くことができるのか、支援も含め考えていきたい。

以上が来年度以降の展望である。

情報ものづくりコース4年 佐藤駿

私は、4年間被災地実情班に所属し活動してきて、今年初めて自分の実家以外の場所をフィールドとして視察することができた。これまでは自分が知っている場所の話だったため、自分のことのように話を聞くことができていた。しかし、今年は輝良々さんの追体験を通し、自分が経験した場所以外の震災について知ることができた。これによって、震災が起こる場所は自分が暮らしている地域だけの話だけではないのだと改めて実感することができた。これから先も大きな災害がいつ起こるかわからないため、その場所にあった対策を行い続ける必要があると感じた。また、輝良々さんの追体験を通じて学校の友達を亡くすことの辛さを感じることもできたため、教員になった際は一人の命も取りこぼさないような安全教育を行っていきたいと思った。



情報ものづくりコース4年 半田柊斗

私自身が来年度から教壇に立ち、児童生徒に震災や防災について伝えていく立場にある中で、教員が児童生徒の命を守るためにできることは多いということを確認することができた。

講話・意見交換を通して、児童生徒が自身の命を自分で守るための術を理解し、身に付けられるようにしていくことが教員の大きな役割の一つであり、防災にもつながっていくと考えた。だからこそ、震災を経験したことのない児童生徒が震災を自分事として捉えられるよう、私がこれまで経験したこと、学んできたことを伝え、共に考えていくことで、自分事として捉えるきっかけづくりを行っていく。また、災害について深く考えることを特別なものにするのではなく、場所や被災経験にかかわらず、皆が災害について学び、考え、備えていくことができる活動の機会を保証していくとともに、児童生徒から、家庭、地域と輪を広げていきたい。その第一歩として、教員として目の前にいる児童生徒と災害についてともに考え、備える活動を行っていく。

これらを実現させるために、今後も震災について学び、向き合い続けていく覚悟である。



理科コース4年 柴田敬介

今回の視察では、当時学校の管理職や教諭だった先生2人と津波に追われながらも九死に一生を得た人の被災体験を聞くことができた。今回の視察では、実際に避難経路を歩いてみたり、津波で流されてしまった家があった場所まで行ってみたりすることができ、話を聞くだけでは感じることでできないリアルな被災体験をより深く感じ取ることができた。特に門脇小学校の校長先生だった鈴木洋子校長先生と女川二中の教諭だった阿部一彦先生のお話は、子どもたちを守るために当時の学校の先生たちがどのようにして動いていたのかを詳しくすることができ、もし自分がその立場だったらどう動くかの参考になる貴重なお話であった。2日間を通して一番印象に残ったのは阿部先生の「何をやるにも授業に落とし込む」という言葉である。授業としてやることができれば継続ができ、そこに絆(つながり)が生まれるが、授業外でやろうとするとその分しわ寄せが起きてしまい続けることが難しくなってしまうとのことだった。教師の本分は授業ということに改めて認識できるとともに、授業というのは教師と子どもがいて何を取り上げるかよりも、何を子どもたちに伝えたいかということの方が重要であると感じ、次は自分が教師として子どもに伝えていく立場であることの責任を考えさせられる視察になった。

4年間で様々な被災体験談や震災遺構、被災地に触れ、命や災害に関することを超える自分が教師としてどうあるべきかに向き合うことができたと思う。今まで語られることがなかった当時の記憶を被災地の方々と共有し、伝えていくことができる立場であることを忘れず子どもたちと共に成長していける教師を目指していきたい。



技術専攻4年 吉田翔吾

今年度、私は、視察等の活動に参加できなかったため、自分の経験として学ぶ機会が少なかった。

一方で、4年間の活動を振り返り、新たなフィールドで調査し、活動の幅が広がり、私たちの活動が取り上げられるなど、自分たちが被災地の実情を知るだけでなく、活動を通して実情について発信していく立場になっていることを感じている。

来年から教員としてこの学びを伝えていく中で、どのように伝えていけばよいか模索中であるが、震災を経験していない子どもたちが深く学び考えていけるよう自分の経験を発信していきたいと思う。

また、私の4年間の被災地実情班としての活動は終わるが、これからも震災、防災についてアクティブに学んでいきたいと思う。



理科コース3年 小野崎彩菜

昨年度までの視察は、被災地に足を運び、インタビューを行うことが主な活動でしたが、今年度の視察では、それに加え、「避難の追体験」をしたことが有意義な学びになりました。この追体験を、当時の子どもたちの立場、教員の立場、その両方を行き来するようにして考えながら、津波避難について考えました。実際に避難の足取りを辿ると、その土地の地形、高台から見える景色、建物の位置関係、道路の構造などを捉えることができ、それは追体験をしたからこそ、得られた学びや気づきでした。この後に行われた、元門脇小学校校長の鈴木洋子先生の講話では、当時の避難の様子、防災教育の在り方について詳しくお聴きしました。最も印象に残っているのは、防災教育は、日頃の生活指導、教科指導のなかにあるということです。これは、阿部一彦先生（震災当時、女川二中教諭）も同じように語っていました。防災教育というと、何か特別なことをしなくてはいけないと思いがちです。しかし、大事なことは、廊下の歩き方、縦割り活動など、子どもたちが生活で繰り返し行うなかで、防災の力を身に付けていくことであり、防災教育は日常の中にあるということを学びました。

今後は、これまでの活動を基に、自分たちが得た学びや教訓を、周りにどう伝えていくかを考えていきたいです。そして、被災地実情班の核心である、被災地に赴き、現場を肌で感じるという活動を継続し、東日本大震災の体験と教訓を未来へつなげていきたいと思えます。



数学専攻3年 在原真優

今年度は、震災当時小学生だった輝良々さんの震災の追体験をすること、そして震災当時学校に勤務されていた方の話を多く聞くことができ、教員という立場における被災について考えることができました。子どもの命を守るため、子どもの心を守るために行動された先生方の話を聞き、事前の準備や普段の行いが咄嗟の判断や命を守る行動につながるということを学びました。また、阿部先生のお話の中で子どもは大人が思っている以上に多くのことを見ているし感じていて、大人の想像で子どもの見る世界を制限しすぎるのも良くない場合もあるということがわかりました。子どもの心のケアはもちろん大切だが、何も見ないようにするとかえって前を向くきっかけをなくしてしまう可能性もあるという話もあり、今までになかった視点で印象に残りました。

今までの3年間の活動で震災当時さまざまな立場だった方にお話を聞き、成功談も失敗談も多く聞くことができたため、これからは、それらを自分の今後を活かすこと、そして震災を知らない子どもや友人などに伝えるということも考えていきたいと思えます。



未来づくり教育創生コース2年 阿部志帆

今回2日間の視察を通して、当時の実情を知ることに加え、自分自身の教育観を見つめ直す貴重な機会を持つことができたと感じている。特に、阿部和彦先生のお話の中の言葉にある、「『本物』の学校とはなにか」という問いが印象に残っている。阿部先生曰く、「本物」の学校とは、教員、生徒、そして授業であるという。このお話を聞き、学校を成り立たせる基本的な土台とは、建物や道具など物理的なものではなく、教員や生徒などの命そのもの、命そのものが作り上げる授業というように、命の存在があってできるものであるということを知り、東日本大震災のような命と隣り合わせの危機的状況にさらされている中で見つけた、学校や子どもたちの存在の尊さについて感じる事ができた。また、子どもたちの可能性が社会に大きな力を与えるということも学んだ。「子どもたちの声が生きる源」という言葉にあるように、学校には、生きる源である子どもたちがつまっている場所であり、その子どもたちの存在が、地域の人々の生きる理由になり得るのかもしれないと感じたとき、子どもたちの見えない力が、大きく社会を動かしているというように感じた。このような学校、子どもたちを守る立場になろうとしている一人として、自分ができること、自分が伝えることができるものは何かについて日頃から考え、生活していきたい



未来づくり教育創生コース2年 皆川満里奈

今回の研修では、震災当時先生だった方にもお話を聞くことができ、将来教員を目指す私にとって有意義な研修となりました。学校の避難行動が地域の避難行動を促したというお話も聞くことができ、改めて学校という存在が地域にもたらす影響の大きさを知ることができました。小学生でも地域のためになる行動ができるという意識づけが重要になってくると思います。また、私は今まで「小学校でどのようなことをすれば子供たちの防災意識が向上するのか」という疑問を持っていました。しかし、お話を聞いていく中で、日頃の生活指導をきちんとしておくことで、いざという時に指示が通り、結果的に子供たちの命を守ることにつながるのだと学び、自分の中で答えに少し近づいたような気がしました。様々なお話を聞いていく中で、子供たちの命を守る教員になりたいという気持ちが更に強まったので、これからも学び続けていきたいと思っています。



未来づくり教育創生コース2年 高橋輝良々

今年度は、震災当日の私の追体験から当時門脇小学校の校長であった洋子先生と担任であった香先生との再会が叶い、改めて自分の中の東日本大震災について考える年となった。誰かに被災体験について話すことをしなかった自分だが、受け止めてくれる班の皆がいてくれたおかげで、震災から初めてずっと心の中にあった想いを素直に伝えることができ、どこかほっとしていた。しかし、それは想像以上に心の負担や不安もあり、伝えることの難しさにも直面した。それでも、13年前に先生方に守ってもらったこのいのちを、これから先で生きていく子どもたちのいのちを守るために繋いでいかなければならない、という想いが今の自分の中に強く残っている。子どもたちと一緒に過去から学び、考え、災害が起きたとしても必ずみんな一緒に生き延びることができるよう、自分が被災者、そして教員としてできることを実践していきたい。



未来づくり教育創生コース2年 五十嵐真子

今回の視察を終え自分なりに考えてみたときに、災害時や災害後の行動に「正解」はなく、咄嗟の判断やたった1つの行動、たった数分・数秒の差だけで物事の流れや生死が大きく分かれてしまうということをととても感じ、これが、被災者の方の口からよく聞く「たまたま」という言葉につながったように感じた。特に鈴木洋子先生のお話から、その「たまたま」には、学校の規律を整えたり地域の方との関係を築いたりという日々の取組が大きく関わっているということを感じた。その一方で、実際に災害に直面した時にこれまでの取組等が自分や周りの人の命を守ることにつながるとも限らず、反対に、災害に関する知識がある程度あったことが自身の身を危険に晒す要因にまでなってしまう可能性がある、というような不条理な事実にも直面した。しかし、私は今の自分の学びや行動、日々の取組等が「たまたま」命を守ることにつながると信じ、学び考え続けていきたいと思った。また、教員を目指す身としては、「防災教育や災害時の対応は自分に任せてほしい」と自信をもって言うことができるくらい、防災・災害後の対応等についてもっと学んでいきたいと強く思った。

